



時の玉手箱

3月23日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

激しく照りつける日差し。

焼けたアスファルトからのむせ返るような熱気。

日焼けクリームの甘ったるい匂い。

徹夜明けで酒も抜け切らないぼくらはくらくらしながらそこに立ち尽くしていた。もうすぐサークルの女の子たちが電車に乗ってやって来る。同期の子たちだけじゃない。こういうところにはめったに参加しないリカ先輩が来るらしい。地元だからしぶしぶなんだそうだけど、しぶしぶでもリカさんが来るなんてすごい。そして楽しい一日を過ごすんじゃないか。灼熱のビーチで水着になって！ それまでにこのしゃっきりしない頭を何とかしなくては。ぼくはサングラスをはずし既に汗ばみ始めたTシャツの首のところに引っかけて、残酷なまでに晴れ渡った雲一つない青空を見上げ、太陽を見てしまってくしゃみをする。風邪引いたんじゃないかーだろなと車を出してくれた田島さんが言う。大丈夫ですと笑って田島さんの方を見ようとしたら世界が大きく回り始めて、青空や駅前の広場を取り巻く店や竜宮城みたいな建物がみんなぐるぐるして遠くにリカさんの姿が見えた気がしてそれから記憶がない。

* * *

「風博士！ 風博士！」

誰かに揺り起こされて男はうっすらと目を開く。最初に目に入ったのは毒々しいほど真っ赤な建物だった。そうだった。貧血を起こして倒れたのだった。おやおや。空がずいぶん曇っている。青空はどこに行ったのだろう。これじゃあまるで荒れ模様じゃないか。あの日は一日ものすごく暑い天気だったんじゃないかな。とりとめもなくいろいろなことが思い浮かんで消える。

いけないいけない。こんなにだらしなく伸びっぱなしだと、このあとヒサノやリカさんが自分のことをすごく心配することになるじゃないか。そして田島さんをはじめ、野郎どもが興奮してしまふんだ。あいつばかり大事にされて、水着の女子をはべらせて。海に何をしにきたんだかわかりやしない。男はまわりを安心させるべく、無理ををしてでも微笑みを浮かべようとする。とたんに顔面全体に激しい痛みが走り、思わずうめき声を上げてしまう。すみません、リカさん、何でもないのでから。

「大丈夫ですか？ 風博士、目を覚ましてください！」

ようやく男はしっかりと目を開き、二、三度強くまばたきをし、むくりと身体を起こす。どよ

どよと安堵の音が周囲に湧き起こる。風博士と呼ばれた男はぐるりを見回し、たくさんの人々が自分の様子を見つめていることに気づく。それから少し離れたところに仁王立ちになって自分をにらみつけている大男がいることにも気づく。そして自分が学生でもなく、ビーチに遊びにきたのでもなく、二日酔いでもなければ、貧血で倒れたわけでもないことを思い出す。どうしてそんな勘違いをしたんだろう。そうか。この建物のせいだ。

竜宮城を模したとされるその建築は、いまは無法者たちの根城となっている。かつては駅舎だったそうだが、電車などとっくの昔に使われなくなり、いまは山賊めいたグループの城となっている。地元の人々から金品を奪い、作物を搾取し、若い女をさらい、この地域の支配者となっている。その頭目は元々この地域の警察を束ねていた男だということからたちが悪い。でも無政府状態になった日本では、同様なことが各地で行われており、別に驚くには値しない。そしてその頭目こそ、いまそこに立っている大男だ。眉間から血を流しており、恐ろしい顔つきの怪人だ。

大男が用心深く近づいてくる。男は身震いする。もう自分には打つ手がない。こんなバケモンを相手にこれ以上闘えとは思えない。風博士は何とか腹に力をこめて立ち上がり、できるだけ堂々として見えるようにすくと立つ。少しでもひよろひよろして見えないようにと願うが、やせっぽちの体型を隠せるわけでない。それでも大男が警戒しているところを見ると、最初の攻撃がそれなりにこたえたとはいえない。だから風博士は再び右腕を斜め上に上げると風を招くようなしぐさをしてみせた。大男はその場でしゃがみこみそうな姿勢になった。やっぱりだ。やっぱりさっきの突風で怯えているのだ。

風博士は自由自在に風を操り、帆船を思い通りに走らせることもできれば、風力発電の風車を動かし続けることもできる。吹き荒れる風をぴたりと止めることもできれば、突風を引き起こし投げつけて気に入らない者を叩きのめすこともできる。

自分自身にまつわる数々の奇妙な伝説の中でも、この魔法使いめいた伝説はわりと気に入っている。なぜならその土地の風のことが分かりさえすれば、あたかも自分が風を操っているように見せかけることは簡単だからだ。だからちょっとした茶目っ気から、この伝説だけは積極的に利用している。それを詐欺と言われようと何しよう関係ない。自分からそう名乗ったことはなく、ただ吹いている風を上手に利用しているだけだ。それを科学と見るか魔法と見るかはそう思う方の勝手だ。

でも時々、こんな風に各地の力自慢からのストリートファイトを挑まれることもある。別に勝っても負けてもかまわないので、こうやって相手をする羽目になる。特に今回は、そのあたりの住人たちに迷惑をかける大男を退治してほしいというたつての依頼だったため、断るに断れなくなってしまったのである。今回も突風の予測にあわせて小道具の玉手箱を開いたら都合よく吹き飛ばされた箱が大男の眉間に当たって派手な出血をさせることになったわけだ。

力自慢に限って迷信深いことが多いので、うまくいくかもしれないと引き受けたがとんでもなかった。大男は期待通り迷信深くもあったが、それ以上に腕っぷしが強く、荒くれ者で、風博士など本気でぶつかったらひとたまりもないことがすぐに明らかになった。突風の予報は一回限りだし、小道具の玉手箱も、もうない。大男の眉間に勢いよくぶつかって粉々に壊れてしまった。

でもまあ、と風博士は考える。ギャラリーのみなさんにも楽しんでもらわないとな。男は掌を外にして高々と差し上げた右腕をくいっと返し、軽く内側にたわめた形にすると、良く通る声で「ウン、ゼン、フウ、スイ、カ！」と叫んで大男目指して走り出した。もちろん何の意味もない言葉だが、こういうのが意外に効果を発揮するのだ。大男はうろたえた様子になった。また突風が襲ってくると思っているのだ。実際にはただひよろひよろした男が駆け寄ってくるだけなのに。風博士は思わず微笑みをもらし、それを見た大男の顔に明らかな恐怖の表情が浮かんだ。

「待って！」

女の声がして、とたんに大男の目が泳いだ。それを見て風博士も歩調を緩め、立ち止まった。右腕はまだ高々と掲げたままだった。小田急片瀬江ノ島駅と書かれた門の下から一人の女が出てきて、大男のそばに寄り添い、うちの人を傷つけないでと言った。きれいな女だった。この人にもう悪さはさせないから、それ以上ひどいことをしないで、と。風博士が黙って女をにらみつけていると、驚いたことに女はだしぬけに風博士の本名を君づけで呼んで、あなたなんでしょう？と言った。

風博士はしばし女の顔を見つめて、やがて呆けた表情になって言った。

「リカさん？」

「さっき起き上がる時にわたしの名前を呼んだでしょう」

「え？」

「それでわかったの。あの時と同じだったから」

風博士が右腕を思わずぱたりと下ろすと同時に、偶然ざわざわと風が吹きわたり、よどんでいた雲の切れ間から日が差し込んできて駅前の広場を明るく照らし出した。ギャラリーはまたどよどよと騒いだ。怯え切った表情の大男は何度も頷き、手下にも無茶をさせないことを約束した。こうしてまた風博士の伝説がひとつ加わることになる。しかも今度は悪いやつを打ちのめしたばかりか改心までさせたという話に。

手下に無茶をさせないなんて言ったって、そんな約束、どうせそのうち破るのだろうが、まあそう言わせてだけでも価値がある。そう思って風博士はうんうんとうなずいた。うなずきながら

だんだん広場や建物や竜宮城がぐらりと傾き始めるのを覚える。やがて風博士は貧血を起こしてまた何十年ぶりにリカ先輩の世話を受けることになる。でもまあ、それはまた後の話だ。

(「江ノ島」 ordered by さんぽ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

時の玉手箱

<http://p.booklog.jp/book/46699>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46699>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46699>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.